

第1部 キリスト教と経済国家・イギリス

第1章、自我の独立と資本主義

1, 血縁社会から離脱

15世紀から始まった大航海時代には、ポルトガルとスペインが世界を制覇し、17世紀にはオランダ、フランス、イギリスが覇権を争い、18世紀から20世紀の初めまでは、イギリスが勝利者になった。

世界のほとんど全ての地域では、社会の基礎には血縁共同体が存在し、それらが地縁と結合して国家が形成された。しかし、西ヨーロッパはその例外であり、早くも13世紀に血縁的な社会関係が希薄になり、それ以降、次第に個人が単独で生きるという当時としては不思議な社会に変わった。

イギリスがその典型である。そこでは、まず、血縁共同体型の農耕形態が消滅した。三圃制度が普及して、農作業の手順や、放牧地・水車の利用（製粉・灌漑）は地域（村落）共同体で行うようになった。また、長子相続制だったので、それ以外の子供は地域共同体から離れて単独で都市に出たり、農村で低賃金労働に従事するしか生きる道がなかった。

次に、キリスト教が血縁社会を断ち切った。中世のヨーロッパ人にとって、夜は恐ろしく、森から不気味な動物のうめき声や、風のざわめきが聞こえ、魔物が森と共に家の前まで来ているように思えた。

キリスト教が、世界はすべて創造主たる神の摂理によって動き、魔物は存在せず、幸福や不幸、晴れや雨は、すべて神の摂理によると教え、人々がそれを信じた時、魔物、不吉な伝説、タブーが消え、森の中で安心して生活できた。

人間は神に逆らった原罪を背負っているから、地獄に落ちる可能性が大きい。教会は神に最も近い存在であり、教会に通う信仰の生活を送ることによって、天国に入れると考えられた。キリストがこの世に再臨した瞬間に、この世が天国に変わり、最後の審判をパスした者は、この天国で永遠の命を得るのである。

教会は、信者に信仰のありがたさを説教すると同時に、正しい家族として一夫一妻を要求し、また再婚や養子縁組を妨げ、血族の拡大を防ぎ、信者の資産の分散を防いだ。当時、平均寿命が35歳ぐらいであり、相続すべき子供を出産する前に、夫婦とも死ぬ場合が少なくなかった。相続者がいない信者の土地は教会に帰属し、教会は大きな利益を得た。寡婦や未婚女性には、生存中に土地を寄進して血縁関係から離れ、独立した個人となり、教会や修道院で働くことを選択する人が少なくなかった。

2, 宗教革命と独立した自由な個人

14世紀にペストが猛威を振るい、ヨーロッパの人口が激減し、労働力不足に陥った。西ヨーロッパでは、封建的秩序が崩れ、農民の地位が変動して階層分化が進み、社会が不安になった。そうした時には、キリスト教が必要だった。

ローマ法王庁は、信徒を拡大する巧みな組織を創造した。農民、貴族、都市生活者等あらゆる階層の出身でも、信心深く、優れた人材であれば、聖職者になれる。努力すれば、貧しい階層の出身者もローマ法王を頂点とするピラミッド型組織の階段を上ることができた。カトリック教会のリクルートは俗界に開かれ、優秀な人材が集まった。

一旦、聖職者になると、俗界から隔離された生活を強制され、結婚や聖職の売買等は固く禁じられていた。彼らは単身であるから海外布教コストが低い。また、ポストは血縁と関係なく実力に従って決められるため、激しい出世争いが生まれ、キリスト教は世界の隅々まで布教された。

カトリック教は、高い理念を掲げて、寄贈された土地を固く守った。修道院は荒れ地の開拓、運河の造成、ぶどう園の経営、羊毛の生産等、経済の発展に尽した。西ヨーロッパの農村では、熱心な信者が増え、聖職者が政治権力を握り、封建制度の崩壊にともなって生じた社会的混乱に秩序を与えた。

イギリスでは、15世紀になると、農民層分解が一層進み、所有する土地が大きく豊かな農民は、さらに貴族から大規模な土地を借り、多数の労働者を使う農業経営者に成長した。土地を失った農民は、シーズンごとに解雇され、絶えず新しい仕事を農村の外に求めた。次男以下の子弟の多くは、農村を出て仕事を求め、町へ、ロンドンへと流れ、仕事にありつけない者は、浮浪者や物乞いになった。有産の経営者と無産の労働者との階層分化が始まった。

16世紀中頃、宗教革命の時、ヘンリー8世は、政治に介入してくるローマ法王庁を脱退して、新たにイギリス国教会をつくり、その長に就任した。彼は直ちにカトリック教会が所有する土地を国有化した後、民間に売却して国家財政を豊かにした。地方には、貴族より豊かな大地主が生まれ、爵位をもった実際の貴族とともに、ジェントルマンと呼ばれた。彼らが所有する土地は、全イングランド農地の60%を超えた。

ジェントルマンは、無報酬で地域の行政・治安を担当する「治安判事」の役を引き受けた。彼等は名望家として信頼され、イギリス民主主義の基盤である「ノブレス・オブリージュ」の精神が生まれた。財政が豊かになった政府、ローマ法王庁の支配を脱した国教会、ジェントルマン層の三者が一体となった新しい社会秩序が生まれた。

農業経営者、自作農、中小地主は、それぞれ牧草地で羊を飼い、羊毛を生産し、毛織物に仕上げた。16世紀のヨーロッパは経済成長期に入り、毛織物需要が拡大した。

イギリスの毛織物工業は農村から都会に拡がり、17世紀には軽量の新毛織物が開発され、仕上げ、染色まで全工程を引き受けた。国王は都市の製造業者を保護・育成し、個人

が能力を充分発揮できる環境をつくり、工業の資本主義的生産が始まった。イギリスは工業製品の輸出国に発展し、先進国のオランダを追い上げた。

資本主義的生産には、宗教・伝統・血縁・地縁から切り離された孤独で「独立した個人」の労働者が必要だった。彼らは孤独であり、経営者の命令に素直に従うしか生き方がない。その頃、優れた学者達が「独立した個人」の価値や社会的な意味を理論づけることに熱中した。

3, 勤勉・節約の精神の普及

16世紀には、キリスト教で大変革が生まれた。カトリック教の根本原理とは、洗礼という儀式によって、自分の信仰を告白し、カトリック教共同体の正統教義に服従することを誓うことである。そこでは、独裁的政権のような厳しい権力ヒエラルキーが形成され、教会が神に最も近い存在として世俗的な権力を握っていた。

個人の決断によって選択されたはずの信仰が、宗教共同体の権力組織に吸い込まれ、最も神に近いはずの教会が、俗世間の権力へと墮落しはじめた。ローマ法王庁は、国王の任命権を獲得する程の力を備えた。カトリックは世俗化するとともに組織や規律が乱れ、司祭職が売買され、免罪符が売られ、ラテン語の聖書を読めない司祭も増えた。

これに対して、ルターが、信仰は宗教共同体の中では深まらない、神と個人とを結びつける教会は不要であって、個人の心が信仰、懺悔、恩寵へと向けられれば、神と直接に係わることができる」と説いた。絶えず聖書を読み、自省すれば神が現れると信じ祈ることが信仰だと主張した。彼は、聖書をドイツ語に翻訳して誰でも読めるようにし、腐敗したカトリックの戒律を無視して若い元修道女と結婚し、子供を持った。まさにカトリックに対するプロテストだった。

カルヴァンは、神の絶対性を強調した。神は誰を救済するかを既に決めており、人間や教会の頼みを聞き入れる程、ヤワな存在ではないという。人間は神が決めた運命に従って、誰の助けも借りず、孤独に生きる存在である。

我々は救済されるかどうか全く判らないが、勤勉、節約、禁欲、規律遵守の信仰生活を送れば、神が救済を決めた人間に属しているかもしれない。信者が勤勉・節約の生活を続けると、次第に豊かになる。その豊かさは信仰生活の証拠であり、救済される可能性が大きいといえる。マックスウエーバーが指摘したように、カルヴァンの出現によって、勤勉・節約という資本主義の倫理的基礎が形成され、中世を脱することができた。

16世紀後半から、ヨーロッパ大陸では、凄惨な宗教戦争が繰り返された。デカルトは、有名な「我思う、故に我あり」という論理によって、宗教から離れた自己の存在を証明した。その「我」とは、どの宗教、共同体、民族、国家にも属さない純粋に独立した精神である。個人は絶対的な存在であり、自然や社会や宗教を科学的に分析する主体でもある。デカルトは、宗教対立で混乱した時代に、理性の光を与えた。ニュートンは、神が宇宙を

支配する原理として、万有引力という全ての人類が理解できる法則を発見して、近代科学の基礎を築いた。

ホッブズは、生まれながらに人間が当然持っている権利を自然権と名付けた。それは、全ての人々が自分自身の生命を維持するために、自分が欲するままに、自分の力を行使する自由である。つまり、全ての人間は、自身身の判断力と理性によって、そのための最適な手段を選択する自由を持っているということである。

しかし、17世紀中頃には、血縁・地縁関係が希薄になったので、世の中に「独立した個人」の争いが増え、生命が脅かされる社会に変わりそうだ。それを防ぐために、ホッブズは、次のような契約社会を提案した。

まず、あらゆる人は、自分の生命を守るために武力行使するという自然権を譲渡し、自らは平和な社会で自由に活動する権利を獲得するという契約を主権者と結ぶ。主権者は専ら外敵から市民を守り、社会秩序を維持するためだけに武力を行使し、あらゆる人が自由に行動することを認める。主権者とは国民が選んだ政府（国家）のことである。

ロックは、17世紀の終わりに、資本主義の法的な基礎理論を築いた。彼によると、真の宗教は内面的であり、その根拠は信仰にあり、「好きなように信じなさい。ただし、それによって、他人に迷惑をかけてはいけません」、宗教は、私的な空間に止まるべきである。」という。（ウルリッヒ・ベック「私だけの神」・岩波書店）

また、ロックによると、人間はすべて自由・平等であり、自然に対して働きかけて、果実を得た時には、そのすべてが個人に帰属し、その所有権は社会の合意によって守られるべきであるとした。宗教は社会の背後に退き、契約が社会秩序の中核的位置を占めた。

アダム・スミスは、産業革命が始まった18世紀後半に、「国富論」を書き、「全ての人々が、専ら自分の利益を目的として働いた時、最も公共の利益が拡大する。誰も、公共の利益を考慮して働く必要は全くない」と記した。世のため、人のために尽くそうと思うならば、まず、自分が金儲けのためにせつせと働くべきだという。

ある製品が生産コストよりも高く売れ、儲けが大きいとしよう。自分のために金儲けを狙う人は、その製品の生産をどんどん増やすから、コストが低下して、全ての人々がその製品を安く買うことができる。彼は世の中で必要な物を大量生産して、自ら儲け、かつ、世のために尽くしたのである。人間は神を信仰しつつ、利益を得ることに生涯を捧げるべきである。

4、自由な個人と「神の見えざる手」の作用

「独立した個人」という自覚が生まれたのはキリスト教徒だけだった。イスラム教徒は集団でムハンマドが決めた戒律に沿った生活をし、ヒンズー教徒はカーストの中で生きた。仏教徒は自己を消滅させて解脱に努めている。儒教は大家族を優先する教えであり、徳川時代の日本人は、封建的秩序の枠内で生活した。

キリスト教以外のどの宗教でも、個人は集団を意識して、同じ戒律や規律の下に生きるべき存在だった。ところが、キリスト教では、個人を家族・国籍・いかなる集団とも関係がなく、自由に行動出来る抽象的な人間として捉えた。

また、自由な金儲けが、人生の目標の地位を占めた。正しい方法によって儲ければ儲けるほど、神が祝福するというのは、本来の「神」の概念からして、どう考えても変なロジックだ。しかし、個人の独立と、この身勝手な金儲けの承認こそが、キリスト教文明が18世紀以後、産業社会を創造し、世界を支配するエネルギーの源泉だった。

資本主義社会では、命じられた場所で命じられたままに働き、必要な時に採用され、不必要な時には解雇される「独立した個人」が必要である。彼は国籍も家族もない抽象的な人間として存在しているから、組織のトップには、彼らが職を失った時にはさぞかし生活に困るだろうといった思いやりは不要である。資本主義は、誰でも必要だと思われる徳や人情から離れた社会を創った。

貧しい人が社会に溢れ、秩序が乱れて生存が脅かされた時、宗教が社会秩序を守る機能を果たすものだ。ムハンマドは、アラーの啓示を受け、信者はそれに従い、貧しい人には喜捨を与えることを義務づけた。

ヒンズー教徒はカースト制の秩序に収まり、仏教徒は瞑想し、儒教の世界では、宇宙に君臨する「天」が窮状を救う皇帝を選んだ。

カトリック教は、教会組織を通じて、世俗社会を支配し、秩序を維持してきた。しかし、プロテスタントは、その統治力を破壊し、共同体を分解して、個人を解放してしまった。

プロテスタントにとっては、単に、勤勉、努力の生活を送るだけではなく、工夫を凝らして、その成果を隣人に与えることが信仰生活である。生産活動には、合理的な設計、効率的な組織、時間を厳守する労働力が必要である。アダム・スミスによると、分業システムこそ資本主義が発展した基礎である。

スミスは、ピンづくりの仕事の例を挙げている。旧い職人は、1日で1本のピンも作れなかった。ところが、ピンづくりの作業を、1、針金を引き伸ばす、2、真っ直ぐに調整する、3、カットする、4、先を尖らせる、5、先端に頭をつけるなど、18の別々の作業に分け、そこに合計10人の職人を投入すると、1日に4万8000本のピンが生産され、作業能率は4800倍に増えた。

経済が成長して、市場が拡大すると、大規模な分業が可能となり、生産者の儲けは増え、社会は豊かになる。その際、価格が重要な機能を果たす。ある物が需要不足の時には、価格が上昇して生産者は儲かるが、供給過剰に転ずると、価格が低下して儲からなくなる。その結果、需給はバランスする。

しかし、その時、ピン生産の分業のような技術革新が発生すれば、低い価格が需要を激増させ、生産者が再び儲かる。価格の変動は技術革新を生み出す力にもなる。価格は需給を調整し、また技術革新を生む「神の見えざる手」であった。

もっとも、世の中には、麻薬・売春など、非道徳的な需要が多様に存在するが、スミス

は性格が明るい人であって、人間はやりたいうように任せておけば、そう悪いことはしないという信頼感を持っていた。ホブズが、市民と契約した主権者は、市民をないがしろにしないはずだ、と信じたのに似ている。

「神の見えざる手」は他のいかなる神よりも、豊かな社会を創造した。スミスの時代以降、儲けを狙う優れた職人が革新技術と機械設備を発明して、膨大な資金が新産業に集中投資され、産業革命が進行した。道徳的な善の精神を向上させるよりも、正しい方法によって利益を増大させることこそ、市民に幸せをもたらすという信仰が広がった。

5, 国債発行権と強兵

16～17世紀にかけて、西ヨーロッパでは、増税と宗教問題によって反乱が勃発した。イギリス（当時はイングランド）では、17世紀の中期に、ピューリタン革命が起こり、クロムウエルが国王を処刑して独裁政権を樹立し、さらにイングランドが、スコットランド、アイルランドを支配して、それ以前に支配下に収めていたウェールズを加えて、プロテスタントのイギリスという「集団国家」を創った。

クロムウエルの死とともに独裁政権は終焉したが、ピューリタン革命を契機として経済成長の妨げになっていた汚職が消え、また、クロムウエルが当初の目的としていた議会主義の思想が広がった。

この時代には、戦争が頻発し、どの国も戦費の調達に苦しんだ。強国であるスペイン、フランス、イギリスでは、いずれも議会が反対して増税が困難だった。スペインはメキシコから銀を収奪して戦費を賄ったが、間もなく、銀価格が暴落し、資金不足になった。フランスでは、税が主として農民から徴収され、重税が革命の原因になった。

イギリスでは、議会に議員を送っている富裕層が税の大部分を負担した。議会は税の使い方を監視し、特に戦争によって軍事費が拡大した時には、監視が厳しくなった。17世紀中期に、強い権限をもつ大蔵省が設立され、非常時には、国債を発行する権限を与えられた。折から、中央銀行が設立されて金融制度が発達し、国債は証券市場で消化された。

イギリスが、海外植民地獲得競争で、スペインを追い越し、フランスを退けたのは、戦争の時、大量な国債を発行して軍事費を短期間で集め、大量な武器を調達できたことによる。また国民が納得すれば、長期間にわたって国債を継続的に発行して長期戦も戦えた。

名誉革命（1688～89年）後は、議会が承認すれば、戦争も増税も正当な行為になった。また、国民は「自然権」として自由で平等な経済活動が可能になり、国内では自由競争の制度が守られた。

金融市場が発達し、海外貿易は国家の専売制から、私企業の自由な活動に移り、ロンドンの証券市場では内外の国債が売買された。

スペインやフランスは、国家が海外貿易活動に厳しく介入したので、経済の効率が低下し、植民地の獲得競争でイギリスに敗れた。それは、イギリスが近代的な国家統一を完成

した結果といえる。

一方、勤勉・節約・聖書の信仰を厳しく追求した清教徒は、イギリス国教会から弾圧されてアメリカ大陸に渡り、原住民を追い出し、理想的な自然権の国・アメリカの建設に向かった。